

2026（令和8）年度 京都大学 入試問題 文系 第1問 解答例

*1行は約25文字（＋句読点などの記号）。20字程度とすべきだと主張する人もいる。

問一

来日当初の切支丹は、神の愛を説く際、母語では一様に平凡な一語で語るが、日本語の「愛」は不義に通じるニュアンスが強く、清純な意味を含まないので訳語に使えず困惑し、苦心の末、やむなく訳語に「大切」の採用を思いついたということ。

*主部＝初めて日本に渡来したころの・切支丹が

述部＝愛を説く際の・訳語に困惑し苦心のあげく・訳語に「大切」を当てようと・思いついた（ということ。）

***要注意！** 「大切」という語を「発明」したのではない。単語を「発明」とは言わないし、「大切」のような語は切支丹渡来以前からあるので、造語されたわけでもない。つまり、明らかに「発明」というのは比喻だと分かるから、使用は不可である。

*ちなみに、本文筆者が「あちら」の「平凡な語が一つあるだけだ」というのは、この場合（ポルトガル語、スペイン語、イタリア語よりも）、司祭・神父の言葉としてのラテン語であろうが、「一つだけ」ではない。

問二 *文系のみ

明治以来の日本語は、外来文化に合わせた間に合わせの言葉が多く、語義が日常の慣用で内容に適さず、同義語間の違いも不明確であり、日本が言葉の豊かな国であり、日本語が日本文化の特長だとは到底信じられないという考え。

*構文＝「これ」を「言葉の国」と言えるか（X）、「日本文化が「そこ」（＝「これ」）からご利益を受けている」か（Y）、大いに疑問である（という考え）。この並列の構文を崩さないこと。

*「まちまち」「イノチ」など、比喻表現をそのまま用いないように。

*「大いに・疑っている」のニュアンスを忘れないこと。

問三

日本語の多様性は、豊かな心情を簡単明瞭に区別し、一語で表現しうるようで、実は逆に、万事言葉の雰囲気ですませ、心情の深い機微、独特な個性的諸表象を見逃すことへの危惧。

***要注意！** 「あべこべ」とは、「メリットが、逆に、デメリットになる」ことではない。「メリットのように見えて、逆に、実はデメリットである」ことである。

問四

人生に不可避な意義のある事柄が必ず失敗に終わるという真実は、まさに真実だからこそ、素朴に言葉で表現しても不幸になるだけで、無意味でしかないと感じられるから。

- * 「ほんとうすぎる（真実だ）から、きれい」なのであって、「真実であるが、きれい」なのではない。よくある「常識的な」逆接読みをしないように。
- * 傍線部の構文＝「ほんとうのことというものは」（主題Aは）、「ほんとうすぎるから」（限定条件Xだから）、「きれいだ」（帰結述部Bである）となっている。したがって、**正解の構文は、「Aは、Xなので、Cだから。」**となる。（たとえば、「登山は、雨が降っているので、中止すべきだ」という理由は、「登山は、雨が降っているので、危険だから。」である。）

問五

恋愛は、常に一時の幻影であるが、人生に不可欠な虚構であり、恋愛に関する当然の真情を吐露するのではなく、現実世界を超え、人間的な文化の世界へと至り、各人に固有の恋愛を問題ととらえ、固有の解決を得るために、考え、小説を書く（と筆者は考えている）。

- * 京大頻出主題の「リアリズムとフィクションの問題」「リアリズム批判」である。
- * 「本能の世界から、文化の世界へ」とあるが、「本能」は「動物の本能の叫び、～と同断で、」とある通り、あくまでも比喻であり、本能で「手紙を書く」ことはできまい。ここでいう「本能」とは、単純事実、真実、現実の恋愛の相を指している。そうではなくて、筆者は、文化というフィクション、「虚構の文学」を推奨しているのである。